

(竹内) 機材センターの過去・現在・未来についてご意見をいただき、最後に激励の言葉をいただくという流れでインタビューを進めさせていただきます。

まずは、機材センターのこれまでの活動に関する印象や思い出についてお話しただければと思います。

(松村) 私は 82 年入社ですが若い頃に、地区事務所の建設機械系の方からタワークレーンの面白さを教えていただき、非常にタワークレーンが好きになって、機械担当者になりたいと思った時期がありました。

大きく印象に残っているのは、新梅田シティ作業所で空中庭園のリフトアップ工事を担当したことです。世に出始めた三次元測量器を用いて、計測管理に苦労しましたが、機材センターの様々なノウハウのおかげで無事に工事を完了することができました。また、新梅田シティ作業所では東西の棟にそれぞれ 2 基ずつ、合計 4 基のタワークレーン JCC-420 を使っていました。あの当時、420 といったら最大級のタワークレーンでしたので、こんなに大きな作業所にいることができて非常に幸せだと思っていました。

(竹内) 続きまして、今現在、機材センターに求められる役割として、3つの観点からお尋ねしたいと思います。一つ目は安全・品質・コンプライアンスについて、二つ目は生産性向上について、三つ目は技術の伝承についてです。

まず、安全・品質・コンプライアンスについてお尋ねします。

(松村) 工事用機械は、その選択によって工期が決まり、建物の品質が決まるほど、非常に必要なファクターです。よって工事用機械の計画は、機材センターが主体となってやるべきものだと思います。そういった観点から非常に大事な部門であると思いますので、今以上に注力して計画業務をやっていただくことを期待します。

(竹内) 次に、生産性向上について伺います。機材センターは、トラベリングやリフトアップといった特殊工事について汎用化を進めてきました。技術開発も活発にしております。これらの活動と同時に、竹中新生産システムの推進に機材センターとして如何に貢献するか、フロントローディングや作業所の機械化施工支援に如何に取り組んでいくかが大きな課題と考えています。このような生産性向上に対する取り組みについて、機材センターに求める事は何でしょうか。

(松村) 機材センターはこれまで新築工事において、機械技術を用いて生産性向上の様々な取り組みをされてきました。素晴らしいと思いますし、今後も益々進めていくて欲しいです。

一方で、当社の利益の約 30%を占めるリニューアル領域は、会社にとって基幹部分のひとつであるにもかかわらず、機械化が中々進んでおりません。リニューアル領域においても、新築領域と同様に生産性向上をテーマとして、機械化に取り

組んで欲しいと思います。例えば、サイレント工法や屋上防水改修工事対策です。屋上の防水改修工事をするとき、既存防水を撤去すると、躯体にはクラックが入っていることが多く、雨が降ったら下階へ漏れるリスクが非常に高く、工事中は寝むれない日々が続きます。そこで、屋根状の簡易な止水技術があれば、施工担当者は非常に喜ぶと思います。そういった観点で、開発に取り組んでいただきたいです。

(竹内) 続いて、技術の伝承について伺います。技術の伝承は、どの部門でも苦労をされていると思います。機材センターは、大規模な山留杭工事や免震工事等に関して、作業所員に代わって協力会社の指導・管理等を担い、その過程において脈々と技術の伝承及び人材育成を図って参りました。同時に、作業所及び技術部に対して、指導・教育を行っております。このように、情報提供にとどまらず、計画から施工管理まで一貫して対応できることが機材センターの強みと考えて活動を続けてきました。このような技術の伝承、人材育成、そしてそれを活かす機材センターの取り組みについてご意見をいただきたいと思います。

(松村) この取り組みは、これからも続けて欲しいと思います。建築系社員は作業所を跨いで連続して同じ工事を担当することは稀です。免震工事を担当しても、次の作業所に免震装置すらない場合があります。身に着けたスキルやノウハウも、時が経つにつれて忘れ去られてしまいます。機材センターには、そういった山留、杭、免震工事等について、施工管理を含む専門技術やノウハウの伝承に引き続き取り組んで欲しいと思います。

(竹内) 続いて、将来への期待について伺います。未来の建築生産に関して、機材センターに求めること、思いなどがございましたら伺いたいと思います。

(松村) 将来像を描いた上で開発に取り組まれているのが素晴らしいし、描いた技術を是非とも実現して欲しいと思います。しかし、建築技術の伝承において自動化すべきものと、しないものとをきちんと区別した上で、開発に取り組んで欲しいです。

図面が正確であれば、墨出しロボットは墨の打ち間違いをしないでしょう。しかし、図面が正確でなければ、機械は誤った墨を打ってしまいます。根本となる図面を書くのは人です。その技術力が衰えてしまうと、機械化施工が意味を成さなくなってしまう可能性があります。人の技術力を鍛えることは、やはり大事なことです。例えば仮設の単管手摺を設置する際、単管を繋げるためにジョイントピンを用います。ジョイントピンを利用したら、全長が数センチ伸びます。そういったことを理解した上で、図面を描くべきなのです。特に若い世代の図面を描く技術を鍛えなければならないので、鍛える技術の伝承も大切です。しかし、機

械化自体は絶対に良いことなので、これからも益々活発に開発に取り組んでください。

また、リニューアル領域の観点からすれば、当社が施工した超高層タワーマンションの大規模修繕工事を迎えつつあります。超高層建物の外装リニューアル工事に活用できる機械化施工の技術開発も、実現してもらえたらありがたいと思います。

（竹内）最後に、激励のおことばをいただきたいと思います。

（松村）建築業界において機械化施工は、生産性を上げるための非常に重要なファクターであるので、これからも益々大きく成長して欲しいと思います。技術開発に関する社会の動向を常に注視して、それをうまく建築技術に取り入れ、社内に配信してください。機材センターの皆さんの今後の活躍を期待します。

以 上